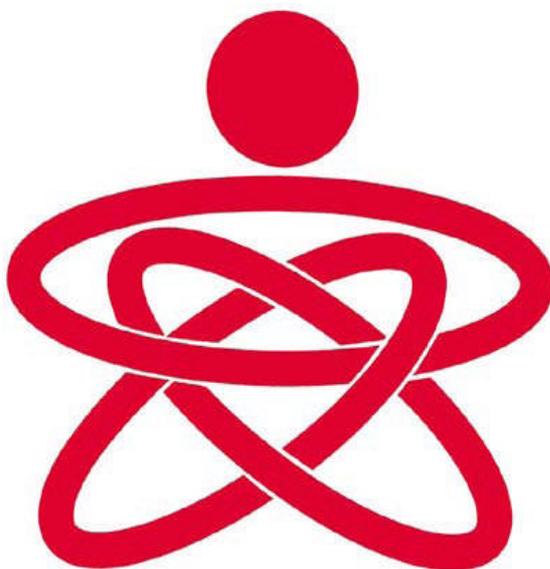


**平成24年度
第2回 ミュージアム・エデュケーター研修
(前半日程)**

テキスト・資料集



主催：文化庁

共催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都美術館

公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館

日程：前半／平成24年9月26日（水）～28日（金）

後半／平成25年2月6日（木）～7日（金）

会場：前半／東京都美術館 アート・スタディールーム ほか

後半／東京都江戸東京博物館 会議室 ほか

平成24年9月 文化庁

目 次

- p 1～ ①オリエンテーション・講義「博物館とミュージアム・エデュケーター」
- p 3～ ②基調講演「博物館での学び」
- p 5～ ③ワールドカフェ
- p 6～ ④講義・ディスカッション「博物館教育論」
- p 7～ ⑤講義・ディスカッション「利用者の博物館体験について知る」
- p 8～ ⑥講義「ミュージアム・コミュニティ」
- p 9～ ⑦講義・事例紹介・ディスカッション
Ⅰ 講義「博物館利用？学校連携？—よりよい利用形態にむけて—」
Ⅱ 事例紹介 博物館の現場から
Ⅲ 事例紹介 学校教育現場の視点から
「美術館を活用した鑑賞授業を通して考える」
事例紹介 学校教育現場の視点から
- p 14～ ⑧教育プログラム体験 Ⅰ「対話型鑑賞プログラム」
- p 15～ 同 上 Ⅱ「貝体新書：おとなが学ぶ二枚貝
—参加者が経験をもとに科学的推理をするプログラム」
- p 16～ ⑨⑩グループワーク
- p 18～ 博物館と博物館教育に関する出版物
- p 19～ 中間課題

①オリエンテーション・講義（26日／10:00～10:30）

博物館とミュージアム・エデュケーター

企画運営会議委員・三重県立博物館館長
布谷知夫

1 博物館の仕事と役割

- 1) 資料の収集保管
自分が暮らす地域のアイデンティティ
- 2) 人が学ぶ場
自由な学びで達成感を得ること
- 3) 地域について調べる
学芸員と一緒に地域を調べる楽しさ
- 4) 展示
資料や地域研究でわかったことを展示

博物館の仕事と利用者との関係を考えて

- どのような年齢、興味、分野の人に対しても、博物館を楽しむための窓口が準備され、博物館に参加したことで好奇心が刺激され、関心が高まるようなプログラムの準備。すべての事業を参加型で。
- 博物館で行われる活動は、すべて博物館の教育学習活動にかかわっている

2 ミュージアム・エデュケーター（博物館の教育担当学芸員）の位置

- 1) もともと日本の博物館では学芸員がすべての事業を担当してきた。
でも、学芸員は、自分の持っている知識を相手に伝えたい、それが好きになってほしい。
- 2) 欧米の影響もあって、博物館教育の必要性が主張されるようになり、大型館では普及課などのセクションが作られる。
- 3) 博物館教育を専門とする人材が増え、博物館内にエデュケーターの配属がされるようになる。
- 4) しかし日本ではそれを専門に教育する場はなく、またポストも予算も少ないため、嘱託や非常勤のスタッフに任され、学芸員は手を出さないような例も多い。
- 5) 博物館に対する社会的な役割についての視点が広がり、博物館に対してもその社会的な役割が求められるようになってきている。

6) 文化庁のエデュケイター研修が2011年から始まる。

これからの課題

- エデュケイター(博物館教育担当者)が配置されていない
- 博物館の教育を学芸員が担ってきたために、その目的が知識を伝えること(その方法)になっている
- 担当者が専任職員でない場合が多い。
- 楽しく時間を過ごすだけになっている事例が見られる

3 今回のエデュケイター研修の目的

- 博物館における教育学習活動の意味・意義の確認
- エデュケイターに求められる基本姿勢の体得
- 博物館での教育学習活動の基礎となる教育理論や専門知識の習得
- エデュケイターとして活動をするための実践力と応用力の体得

さらに加えて

- 博物館の事業の中での教育学習活動の大切さの再確認
- エデュケイターという職業の必要性の確認

この二つについて、研修会を継続することで実践的にその必要性を広め、博物館界の中に定着させる

②基調講演 (26日／10:30～12:00)

博物館での学び

青山学院大学社会情報学部教授

佐伯 胖

1. 学ぶとはどういうことか

学習論のはじまり

エドワード・L・ソーンダイク (1874-1949)

教育心理学の父

効果の法則」の提唱

学習論の展開

バラス・F・スキナー (1904-1990)

徹底行動主義者

オペラント条件付けの提唱

ティーチングマシン・プログラム学習の提唱

今日でも活用されているプログラム学習と行動主義

e-Learning

PDCA サイクル

2. わかるとはどういうことか

ネズミだって、意味がわからないと学習できない。

ガルシアとケーリングの実験

学習とは、(刺激と反応の連合ではなく)ものごとの「意味」を探し求める行為である。

3. 認知心理学のおこり

「認知的である」とは

統合による分析 (Analysisi-by-Synthesis)

認知心理学はどのようにして生まれたか

すべては1956 年にはじまる。

記憶のしくみ (短期記憶、長期記憶、作業記憶)

おぼえること、考えること、わかること

スキーマによる理解

スキーマとは

スキーマがなければ、見れども見えず、聞けども聞こえない。

スキーマがつくられる

先天盲開眼者の視角世界より

スキーマによらない理解

アフォーダンス知覚

人は、世界の中で、動き、かかわり、対話することによって、世界を知る。

モノとの対話

「なってみること」でわかること

擬人的認識論

対話とは、相手に「なつて」みること

母子の代弁コミュニケーション

人は「共感」によって世界を知る

YOU 的他者との出会い

4. 新しい学習論（正統的周辺参加論：LPP）

LPP の5原則

人は、YOU 的他者と出会うと「感染」する。

5. 博物館における学び<まとめ>

「勉強」するところではない。

「見方・わかり方」の枠組み（スキーマ）を獲得する一方、それに捕らわれることの危険性に注意。

ナマの世界で動き、かかわり、対話すること

他者との対話だけでなく、自己内対話も重要

対象に「なつてみる」ことによる理解と発見

YOU 的他者との出会い

なんらかの実践共同体に参加する

ナニモノカにあこがれ、「感染」する場を提供。

③ワールドカフェ（26日／13:10～15:10）

企画運営会議委員・（株）美術出版社「美術検定」事務局

高橋 紀子

企画運営会議委員・徳川美術館普及担当課長

加藤 啓子

テーマ

1. ミュージアムにおける学びとは？
2. エducatorとしてできること・すべきこと

④講義・ディスカッション（26日／15:20～16:10）

博物館教育論

放送大学客員准教授
大 高 幸

博物館における教育を考えてみる

経験と体験のちがい

人文科学系博物館における教育とそのめざすもの

来館者にとっての博物館での経験のメリットとは

ミュージアム・エデュケーター（教育担当学芸員）の役割

引用文献

- 久米あつみ（2012）『森有正再読 ことばと思索』教文館
- コナトン，マイケル（芦刈美紀子訳）（2011）『社会はいかに記憶するか：個人と社会の
関係』新潮社
- デューイ，ジョン（1975）（松野安男訳）『民主主義と教育』（上）（下）岩波新書青 652-3，
青 652-4
- 寺島洋子・大高幸（2012）『博物館教育論』放送大学教育振興会
- 橋本治（2001）『わからないという方法』集英社新書 0085
- 橋本治（2012）『その未来はどうなの？』集英社新書 0654C
- 広瀬浩二郎編著（2012）『さわって楽しむ博物館』青弓社
- ヘンリ，スチュアート（2010）「アイヌ民族と博物館」博物館研究 2月25日号、1-2.

⑤講義・ディスカッション（26日／16:20～17:10）

利用者の博物館体験について知る

企画運営会議委員
林原自然科学博物館展示教育部エドゥケーター
井島 真知
企画運営会議委員・三重県立博物館館長
布谷 知夫

○博物館体験の記憶／長期的な学び
博物館に来る前／帰った後

○利用者の体験について知る工夫
展示評価、利用者調査を組み込んだ展示・プログラム開発

○「共感」する

参考文献

小長谷有紀（2011）『ウメサオタダオと出会う 文明学者・梅棹忠夫入門』小学館

ティム コールトン（2000）『ハンズ・オンとこれからの博物館 インタラクティブ系博物館・科学館に学ぶ理念と経営』3章展示開発 東海大学出版会

ハイン, G.（2010）『博物館で学ぶ』第4章 来館者研究の諸相、6章 来館者を研究する 同成社

⑥講義 (26日/17:10~18:00)

ミュージアム・コミュニティ

企画運営会議委員
東京都美術館アート・コミュニケーション担当係長
稲庭 彩和子

- 1) アート・コミュニケーション事業と「とびらプロジェクト」
- 2) 「とびらプロジェクト」の具体的な活動について
- 3) 質疑応答

⑦講義（27日／9:30～10:00）～学校のよりよい利用形態にむけて～

博物館利用？学校連携？—よりよい利用形態にむけて—

東京国立博物館博物館教育課ボランティア室長
鈴木 みどり

1. なぜ博物館に、学校対応が必要？

- a) 博物館にとって学校とは？
- ・ 不特定多数の来館者の中の一つとしての「学校」
 - ・ 博物館教育での学校対応の歴史
- b) 博物館経営における「学校利用」と児童・生徒数
- ・ 年間計画、実績報告、自己点検評価等への影響
 - ・ 館内の説得のために知っておきたい、「博物館で学校利用を推進する必要性」
- c) 博物館のミッションと学校の目指すもの
- ・ それぞれの施設のゴールと共通点は何か
 - ・ 「ミュージアム・エデュケーター」としての心の支えはどこにある？
だから、頑張れる？
- d) 学校と博物館の学びの違いと効果的な学び
- ・ 学校だからできること、できないこと
 - ・ 博物館だからできること、できないこと

2. 必要なのは博学連携？それとも学校の博物館利用？

- a) 実際の利用方法
- ・ 授業科目の一環として
 - ・ 校外学習として・総合的な学習の時間、グループの調べ学習
 - ・ 職場体験、キャリア学習の一環として
 - ・ クラブ活動の一環として
- b) 「利用者」としての学校を知り、「博物館」としての役割を果たすこと
- ・ 「学校」と「博物館」の求めているもののずれ
 - ・ 「利用者」のニーズを知ること
 - ・ 学校とは違う、博物館としての特性を最大限に利用してもらうこと

- c) 新たな利用方法は考えられるか
 - ・「小学生」「中学生」「高校生」の居場所としての役割
 - ・継続的な利用に向けて

3. 学校をターゲットにした、効果的な博物館利用のすすめ

- a) 教員との意見交換会、教員研修会、見学会など
 - ・お互いのニーズや可能性を知り、より効果的な利用方法の提案へ
 - ・継続的なコミュニケーションで、信頼関係を構築
 - ・各担当が異動をしても継続できる、学校・博物館全体でのサポート体制

- b) ニーズに合ったスクールプログラムの提案
 - ・目的をもった博物館利用への提案
 - ・目的に合わせた博物館利用への提案
 - ・効果的、効率的な対応に向けて

- c) そのほか

⑦事例紹介（27日／10:00～10:15）～学校のよりよい利用形態にむけて～

博物館の現場から

山梨県立文学館 古川 順子

～メ モ～

⑦事例紹介（27日／10:15～10:45）～学校のよりよい利用形態にむけて～

学校教育現場の視点から
美術館を活用した鑑賞授業を通して考える

墨田区立業平小学校主任教諭
南 育子

ミュージアム・エデュケーター
研修会

学校のよりよい利用形態にむけて

～美術館を活用した鑑賞授業を通して考える～

墨田区立業平小学校
南 育子

- 1, 図画工作科における鑑賞の扱い
- 2, 美術館を活用した実践事例より

3, 鑑賞授業の背景として

- | | |
|--------------|-------------|
| ①東京都図画工作研究会 | ②墨田区図画工作研究会 |
| + | + |
| 国立西洋美術館 | 東京都現代美術館 |
| 東京国立近代美術館 | |
| 東京国立近代美術館工芸館 | |
| 東京都現代美術館 | |
| 東京都美術館 | |
| 連携美術館鑑賞研修会 | |
| (2002年から実施) | |
- 毎年、夏期休業中に美術館を会場に子どもの鑑賞について考える研修会を実施
(2006年から実施)

⑦事例紹介（27日／10:45～11:15）～学校のよりよい利用形態にむけて～

学校教育現場の視点から

川越市立霞ヶ関北小学校校長
平岡 健

1 博物館を利用しにくい要因として

- ① 時間的余裕（距離も含む）
- ② 事務量
- ③ 学習内容
- ④ 指導の困難さ
- ⑤ 教育課程の管理
- ⑥ 経費

資料1 年間授業時数

資料2 校内アンケート調査

2 本校の博物館活用施設

3 博物館活用における事前と事後の指導および関係事務

(1) 事前

(2) 事後

4 博物館の学びを有効にするために

人・物・事の観点から

5 管理職から見た博物館活用

⑧教育プログラム体験/ディスカッション (27日/13:10~18:00)

I 対話型鑑賞プログラム

企画運営会議委員
東京都美術館アート・コミュニケーション担当係長
稲庭 彩和子

～メ モ～

⑧教育プログラム体験/ディスカッション (27日/13:10~18:00)

Ⅲ「貝体新書：おとなが学ぶ二枚貝
ー参加者が経験をもとに科学的推理をするプログラム」

京都大学総合博物館館長
大野 照文

～メ モ～

⑨⑩グループワーク（28日／9:30～16:00）

教育プログラムの開発・検証・再開発・ディスカッション

企画運営会議委員・ハンズ・オン プランニング代表
染川 香澄
千葉県立中央博物館環境科学研究科上席研究員
林 浩二

1. 9:30～10:00 1日の流れ紹介
チーム分け
2. 10:00～11:20 プログラム作り、企画書記入
3. 11:20～12:00 発表 各チーム3分（発表2分+質疑1分）
企画書提出（拡大コピーを会場に掲示）

（ 昼 休 み ）

貼り出された他チームの企画書にポストイットでコメントをつける
・いいね！（グリーン）、なぜ？（イエロー）、こうしたら？（ピンク）、署名

4. 13:00～13:30 昼休みをはさんで、他チームにコメント
5. 13:30～13:50 コメントを受けて作戦会議
6. 13:50～15:00 改良プログラム作り（間に適宜休憩）
完成次第提出のこと
7. 15:00～15:40 発表 各チーム3分（発表2分+質疑1分）
8. 15:40～15:55 まとめ

プログラム企画書

No. _____

ミュージアム・エデュケーター研修 2012/09/26～28 於 東京都美術館

プログラム 名称	
作成者 (所属)	
対象者	
場所	
テーマ	
期間・時間	
プログラム 内容 道具 時間経過 活動場所	
受けた助言	
助言を受けて 改善した点	

博物館と博物館教育に関する出版物

1 できるだけ早期に読んでおいてほしい文献(博物館教育)

- 小笠原喜康・並木美砂子・矢島國雄(編著)(2012) 『博物館教育論 新しい博物館教育を描き出す』 ぎょうせい
- 寺島洋子・大高幸(編著)(2012) 『博物館教育論』 放送大学教育振興会
- 加藤有次・鷹野光行・西源次郎・山田英徳・米田耕司(1999) 『生涯学習と博物館活動』 新版博物館学講座・10 雄山閣
- フォーク,J.とディアーキング,L. (1996) 「博物館体験—学芸員のための視点」 高橋純一訳, 雄山閣書店.

2 できるだけ早期に読んでおいてほしい文献(博物館の運営方針、博物館とは何か)

- マックリーン,K (2003) 「博物館をみせる 人々のための展示プランニング」 玉川大学出版部
- 吉田憲司(編著)(2011) 『博物館概論(改訂新版)』 放送大学教育振興会
- 浜口哲一(2000) 『放課後博物館へようこそ』 地人書館
- 伊藤寿朗(2003) 『市民の中の博物館』 吉川弘文館
- 布谷知夫(2005) 『博物館の理念と運営 利用者主体の博物館学』 雄山閣
- 金山喜昭(2003) 『博物館学入門』 慶友社
- 福原 義春(編集)(2011) 『100人で語る美術館の未来』 慶應義塾大学出版会

3 博物館教育の議論をするための文献

- 染川香澄・吹田恭子(1996) 『ハンズオンは楽しい』 工作舎
- ハイン,G.(鷹野光行・他訳)(2010) 「博物館で学ぶ」, 同成社.
- 宮脇理(監修)・福田隆眞・他(編)(2010) 『美術科教育の基礎知識』 建帛社
- アメリカ アレナス(木下哲夫・訳)(2010) 『みる・かんがえる・はなす 鑑賞教育へのヒント』 明治図書出版
- ロンドン・テートギャラリー(編) 奥村高明・長田謙一(監訳) 酒井敦子・品川知子(訳)(2012) 『美術館活用術～鑑賞教育の手引き』 美術出版社

4 博物館の運営や考え方についての文献

- 倉田公裕・矢島國雄(1997) 『博物館学』 東京堂出版
- 鷹野光行・西源次郎・山田英徳・米田耕司(2011) 『新編博物館概論』 同成社
- 大堀哲(編著)(1997) 『博物館学教程』 東京堂出版
- 伊藤寿朗・森田恒之(編)(1987) 『博物館概論』 学苑社
- 椎名仙卓(1988) 『日本博物館発達史』 雄山閣
- 日本展示学会(2010) 「展示論—博物館の展示をつくる—」 雄山閣
- 国立歴史民俗博物館編(2003) 「歴史展示とは何か—歴博フォーラム 歴史系博物館の現在・未来」 アム・プロモーション

中 間 課 題

テーマ：「自館の既存の教育プログラムや利用者の「学び」につながるツールの
振り返り」

締切り：平成25年1月11日（金）（必着）

提出方法：所定の様式（Word）に記入の上、bireki@bunka.go.jp宛てにメール
添付にて提出のこと。PDFは不可。

備考：課題提出様式は後日データをメールでお送りします。

完成原稿で提出のこと（校正なし）。

提出された課題は、課題集として印刷し、受講生及び講師等研修関係者
に共有されます。

**締切りまでに到着しなかった者については、該当ページを白紙にて印刷
します。**